

朝のこない夜はない

仏性ぶつしょうの花はなを咲さかせましょう

山首 鈴木正修



利他行のすすめ

昭徳会の取り組み

最近、昭徳会の特別養護老人ホーム高浜安立荘で入所者のご老人の「オムツゼロ」が達成されました。

介護度が4とか5の人がオムツをしなくてよいなどということは普通考えられないことです。それなのに入所者の全員が「オムツゼロ」になり、「優秀な施設」として、全国的に注目を集めています。

驚いたことですが「若年性認知症」や、クモ膜下出血など脳血管障害を患い50代くらい

でも入っている人がおられます。

少し前、53歳の女性がクモ膜下出血で寝たきりとなり、しゃべることも食することもできず「胃ろう」をして入ってみえました。ところが施設長さん以下、職員の皆さんの献身的な努力でその人は胃ろうが取れるようになりました。自分で食えることができるようになったのです。人間、食べれるようになると元気になります。やがて話せるようになります。もともとお酒が好きなんだとみえて「居酒屋に行きたい」と言い出されました。そこ

で「それじゃあ、みんなで行こう」ということになり、職員さんと居酒屋に行つてビールのジョッキを持ち「乾杯！」とやったそうです。病院ではないのですが、やり方によつてはここまで回復するのです。

他にもそういう例がいくつかあります。それを新聞等で知り、いろいろなところから講演をして欲しいとの声があり、施設長さんがスポーツスマンとなつて講演をして回つていきます。

この話を聞いて嬉しくなり、是非、法音寺の本堂でもやつて頂くようにお願いをしました。

何のために勉強をするのか

これは駒方寮の寮長さんに聞いたお話です。昔に比べて、現在はいろいろな意味で補助が充実してきました。たとえば、高校生、中学生の塾に行くお金が補助金で出るようになります。最近では小学生にも出るようになったそうです。「これで少しは学力が上がるかも知れません」と、寮長さんは言っておられました。

親が身近にいない子というのは、なかなか頑張れません。子どもは親に喜んでもらおう、褒めてもらおうと頑張るものです。そういう支えが無いから、施設では学力がなかなか上

がらないのではないかと思います。そういうことも含めて、御開山上人は、ご自分のことを「お父さん」と呼ばせ、保母さん達をお母さんと呼ばせることによって家庭と同じような雰囲気を作り、子どもたちを育てられたのだと思います。

幸・不幸の違い

大変有名な関西の塾の先生で、生徒をたくさん一流高校に送りこんでいた木下晴弘さんという方がある時「勉強だけを教えて人間幸せになれるのだろうか」と疑問を持ち、卒業生1万人以上に電話をかけて「今、幸せか」

と聞いたところ、半分の人が幸せ、半分の人が不幸せと答えたそうです。

幸せと答えた人は人の為に何かをやっている人で、不幸せと答えた人は「給料が安い」とか「上司が気に入らない」といった、自分の中心の考え方の強い人でした。

今、木下さんは塾をやめ、人に幸せになつてもらふ為には何が大事かということを考え、教えていこうと、社会啓蒙家の道を歩まれています。

そういう方ですから、やはり教え子が頼つてきます。ある時「先生、飲みに連れて行つてください」と教え子が言つて来たそうです。

でも、飲みに連れて行ってくださいと言うのに、「先生の分も僕が払います」と言っただけです。

可愛い教え子からそう誘われて木下さんは「何か悩みがあるんだろうな」と思い、一杯飲みながら「今、どうしているんだ」と聞くと、浮かない顔をして「元氣ですよ」と答えました。変な答えをするなあと思いつつ、「いや、実はそれなんです。そのことで実は先生と一杯やりたいと思ったんです。今の仕事をこのまましていいのかなと。今の会社に入って本当に良かったのかな、こんな

つもりじゃなかったのに、という感じなんですよ」とボツボツ話し始め、「入社試験の時には本部で管理業務をさせると言われたのに、実際に配属されたのは倉庫の荷物の仕分けでした。もっと頭を使う仕事かと思ったのに、ただ物を仕分けするだけの仕事なんて話が違う『こんなはずじゃなかった』と、毎日悩んでいます」ということでした。

——どんな仕事も、ええ仕事——

そんな時、木下さんは決まって松下幸之助さんの話をされるそうです。松下さんは生前、各地の自分の工場を、どんな小さな工場も必

ず年ねんに一回かいまわ回られたといいます。

小さなソケットにつける豆電球まめでんきゅうを作る工場こうじょう

に行いかれた時とき、工場こうじょうの人が豆電球まめでんきゅうを磨みがいてい

ました。それを見みて松下まつしたさんはいきなり「え

え仕事しごとやなあ」と言いわれたそうです。豆電球まめでんきゅう

を磨みがいていた工員こういんさん達は、こんなことがど

うしていい仕事しごとなのかわからず、そんなこと

を言いわれたのも初めてなのでポカンとしてい

ました。そうしたら松下まつしたさんが続つづけて、

「ええ仕事しごとや。あんたらが磨みがいている電球でんきゅうは

どこで光ひかるか知しってるか？山間さんかんの小さな村むらに

はまだ電氣でんきが充じゅう分に行いき渡わたっていない所ところがあ

る。そういう所ところにも人ひとは住すんでいる。そうい

う所ところに住すんでいる人ひとは夜よるになると何なにもできな

い。お母かあさんが家族かぞくのために縫ぬい物ものをしよう

としてもできん。子こどもが本ほんを読よもうと思おもつ

ても読よめん。そこに電氣でんきがつくとな、お母かあさ

んは家族かぞくの為ために縫ぬい物ものができる。子こどもは、

昼間ひるま読よんでいた本ほんの続つづきが夜よるにも読よめる。本ほん

というのは人間にんげんの心こころを豊ゆたかにする。本ほんを読よん

で子こども達たちは未来みらいの夢ゆめを見みるんだ。夜よるも読よむ

と、その夢ゆめをずっと見み続つづけることができるん

だ。あんたらは子こどもの心こころを夢ゆめの世界せかいに躍おどら

せ続つづける手伝てつだいをしていゐるんだ。ええ仕事しごとや

ろ」

うまいこと言いわれますね。そう言いわれて工こう

員さんたちは「自分たちの仕事はそんなに偉

い仕事なんだ」と思い、その途端うれしくな

ってボロボロ泣き出したそうです。

松下さんは常々「相手の人間性を認め、相

手を尊敬し、相手の人格を尊ぶ。そういう心

が大事である。そのためには、笑顔で人に接

し、笑顔で人に言葉をかけ、笑顔で人に労い

の言葉をかける。そう接するのが大事だ。そ

うするとお互いが相手の人間性を認め、相手

を尊敬し、相手を尊ぶようになっていく。ま

ず言葉をかけることが大事だ」と言ってみえ

たそうです。

以前本で読んだのですが、松下さんが事業

を始められてすぐの頃、家と工場が一緒でし

た。松下さんはお風呂に入ったあとでも、ま

だ仕事をしている工具があるとわざわざ「よ

おやってくれてるなあ」と声をかけに行つた

というのです。また、「あんまり長いこと働

いて、体をこわしてもいけないからほどほど

にしておけよ。早く帰らないと家族が心配す

るでな」と、毎日毎日声をかけに行つたとい

うのです。

面白いことに人間は、声をかけてもらうと

身近に感じ、その人の為に一生懸命頑張ろう

という気になるものです。それが、松下さん

の会社が大きくなっていった秘密の一つでは

ないかと思ひます。

仕事をする心構え

こういう話をしながら木下さんは、仕事のことでも困って相談に來た教え子に「どんな仕事でも『ええ仕事』なんだ。君の仕事もそうだ。松下さんの言われる『ええ仕事』なんだ。君の物流の仕事は、ただ物を届けるだけの仕事じゃない。たとえば、そうだ、君にも彼女がいるだろう。その彼女にプレゼントを届けようと思つても、遠方なら物流を介さなければ届かないだろう。その時、君のプレゼントを扱う人がだだくさに扱つたらいやだろう。

丁寧丁寧に、大切な人へのプレゼントだと思つて扱つてくれたらうれしいだろう。そういう気持ちで君もやったらどうだ。『誰から誰かへのプレゼントだ。丁寧に扱わないといけないな。誰かの思いがこもった物を届けるんだ』という気持ちでやると、仕事が楽しくなる。そしてもう一つ、そういう気持ちで君が仕事を一生懸命続けていくと、必ず別の仕事がすぐ与わるから、心配ないぞ」というアドバイスをされたのだそうです。

そう考へていくと、どんな仕事でも大きな意義があるし、気持ちしだいでは必ず未来が開かれていくのだと思ひてきます。

人間は、周りの人を喜ばしていると思うと

喜べてくるものです。お金のためとか、生活

のためしようがないからではダメなのです。

周りの人に喜んでからおう、縁ある人に喜んで

でもらおうと思つて働いていると楽しくなつ

てくるものです。

利他の精神

仕事でも家事でも同じです。誰かに喜んで

もらうためにやると、自分も楽しいし、そう

するともっと喜んでもらえるという、いい相

乗効果が現われてきます。

人間には「仏性」があります。仏性という

ものは、してもらいよりしてあげる方が喜べ

るようにできています。よく「仏性の花が開

く」とか「仏性を開発する」と言いますが、

人の為に何かをするという菩薩行をしていく

と、仏性の花が開いて余計に人の為に何かを

したくなり、そういうことをするとどんどん

うれしくなるといふ性質が、人間にはあるの

です。仏さまは人間をそういう風に作られた

のです。ありがたいことです。